

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第743号 平成26年5月29日

「希少」だからこそ

「ビッグイシュー」という雑誌をご存知でしょうか。

「ビッグイシュー」は、ホームレスの人に雑誌を販売するという仕事を提供して自立を支援するという事業で、1991年にロンドンでスタートしたものです。我が国では2003年に「ビッグイシュー日本版」が創刊され、札幌市内でもこの雑誌を販売している姿を目にするようになりました。

私は、この雑誌の値段が350円と手頃である事や、雑誌を購入する事でささやかながらホームレスの自立支援のお手伝い出来る事もある事あって、出来るだけ買い求めるようにしています。勿論、雑誌としても面白いと思っているからです。

さて、本題は「ビッグイシュー」の事ではありません。実は、「ビッグイシュー日本版」第238号に、ケニア在住の滝田明日香さんが「希少」をテーマに一文をお書きになっており、それを読んで感じる所がありましたので、私もその事について、少し考えてみました。

滝田さんは、「希少」それは守らなくてはいけないもの？ それとも、今、手に入れないといけないもの？ という問題提起をされています。

この問題を考えるについて、滝田さんは、中国人の友人と野生動物に対する価値観について議論した時のエピソードを載せています。

私達は、例えば希少動物に対しては、これを保護しなければならないと考えますが、中国人の友人によると、中国では「希少」というのは「今、手に入れないと二度と手に入らなくなってしまうもの」という見方をする人がほとんどだそうです。つまり、「希少」となれば、残っている間に手に入れないと他の人間が手に入れ、その結果なくなってしまうから損であるという訳です。

こうした話を聞くと、中国人のしたたかさを感じるのですが、しかし現実を見ると、「希少」というものを有り難がったり、自分のものにしたいと考える人間は何も中国人に限った話ではありません。日本人にだって沢山います。

アフリカでは、象牙を取るために象の密猟が行われていますが、日本ではいまだに象牙の売買が行われています。密猟によってアフリカゾウは絶滅の危機に瀕しているにもかかわらずです。

また身近なところでは、北海道でも貴重な高山植物の盗掘が後を絶ちません。これは、「希少」であるが故に、それを手に入れる事による「金儲け」や「収集欲」、

「自己顕示欲」という自己の利益追求に走る人間が少なくない事を良く示しているといえるでしょう。

「希少だからこそ手に入れたい」という考え方は、自分の利益を中心に考えれば合理的だといえますが、しかし、その行きつく先は「希少」から「絶滅」です。

自分さえ良ければそれで良いと考える人達で共同体を維持する事は、不可能だと思います。皆が自己の利益のみを追求し始めれば、社会のルールは維持出来なくなり、最後には、「利益を得られる人は誰もいない」という空恐ろしい世界が待っているという事になります。仮に、自分が最後の勝利者になったとしても、周りには誰もおらず、たった一人となってしまうたら、一体、自分が手にした利益にどれ程の意味があるといえるでしょうか。

この地球上では、人類の活動により野生生物は次々と姿を消しています。人類は、地上の覇者のように見えますが、もしもこの地球が野生生物の生きて行けない地球となってしまうたら、幾ら地上の覇者と威張ってみても、そんな地球に人類は生きて行けるのでしょうか。

利益には、自己の利益と地域のため、国のため、世界のためといった公共の利益というものがありますが、この二つの利益はしばしば衝突を起こします。

「希少だから手に入れたい」という発想と「希少だから守ろう」という発想の間にはとても大きな開きがあり、その間を如何に埋めて行くかは人類共通の課題といえるでしょう。気の遠くなるような時間と歴史を受け継いで今を生きている私達には、そのための知恵が試されている様に感じてなりません。（塾頭：吉田 洋一）